

令和八年二月

大学院文学研究科

中山 さら 提出・学位申請論文（課程博士）

『出雲国造神賀詞奏上儀礼と古代の祭祀』

審査報告書

國學院大學

中山 さら 提出・学位申請論文（課程博士）

『出雲国造神賀詞奏上儀礼と古代の祭祀』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、古代日本で天皇即位と関連して行われた「出雲国造神賀詞奏上儀礼」（以下、「神賀詞奏上儀礼」）の成立から展開の過程と、歴史的な背景・意義について考察したものである。全体の構成は、序章につづき、「神賀詞奏上儀礼」の成立と変容を四章にまとめた第一部、「神賀詞奏上儀礼」を、地理的視点を加え分析し四章にまとめた第二部、そして全体をまとめて展望を示した終章からなる。

第一部第一章「出雲国造神賀詞奏上儀礼の研究史」では、「神賀詞奏上儀礼」に関する先行研究を、近世、戦前、一九五〇年代から二〇一〇年代以降まで、代表的な論考を取り上げ、「神賀詞奏上儀礼」の成立と意義に着目して、年代

別に研究史を概観する。

第一部第二章「出雲国造神賀詞奏上儀礼の成立とその意義」では、果安から弟山までの奏上日を、天皇の即位日と比較し、「神賀詞奏上儀礼」と即位との関連性をみいだす。「神賀詞奏上儀礼」は、即位儀礼を行う忌部氏の忌部宿祢子首が国司として出雲に赴いたことと関連して成立し、天神寿詞と対をなす、国神からの賀詞と位置づけた。また、孝謙朝に「神賀詞奏上儀礼」へ天皇が臨席するが、天皇が直接関与するのは、天照大神に関する祭祀や儀礼のみで、天皇の臨席は本来的な形ではなく、ここには形式的な変質を確認できるとする。

第一部第三章「出雲国神賀詞儀礼の負幸物と献物」では、儀礼の開始時に賜う「負幸物」と、国造が神賀詞奏上時に献上する「献物」に注目し、神祇官において神部が木綿鬘をつけて賜う「負幸物」の金装横刀の性格を、神に捧げる幣帛とした。また、聖武朝の広嶋の奏上記事は「神社の劍鏡」と記すため、本来は劍・鏡のみが神から奉られた品であったと想定する。そして、大己貴神に幣帛の金装横刀を捧げ、出雲神話さながらに祭祀を行ない、大己貴神から天皇に「御世の長久」と「国家の平安」の証として、「献物」の刀（劍）・鏡が奉獻

され、神賀詞が奏上された。これが「神賀詞奏上儀礼」の本質であり、その性格は、国神による天皇の即位関連儀礼と位置付ける。

第一部第四章「出雲国造神賀詞奏上儀礼の変容とその後」では、奏上記事から、天皇即位、国造補任、神賀詞奏上の実施順序を確認し、光仁・桓武朝に変化の画期があったことを指摘する。光仁・桓武朝を境に、天皇の即位後に、補任された新国造が奏上する形式へと変化する。また、桓武朝に「神賀詞奏上儀礼」は二月には行われなくなり、国造に帯同する祝が国史上では確認できなくなる。これは、祈年祭の国幣化の影響によると考えられ、これと整合する「神賀詞奏上儀礼」に関する『延喜式』の規定は、「弘仁式」の造式により成立していたと推定する。

第二部第一章「出雲国神賀詞奏上儀礼と境界」では、神賀詞の近き守り神の成立時期と、儀礼の成立時期とを区別して考える。「神賀詞奏上儀礼」で大己貴神の和魂とされる大物主神は、『日本書紀』では「海外の国も自ら帰伏」させる神であり、神賀詞で大物主神と味耜高彥根神が坐すとされる東西の神奈備

は、大和盆地の境界に位置し、境界外の災いから天皇を守るため配置されたと推定する。この設定時期は、唐・新羅による日本侵攻の危機感が高く、藤原京の造営が開始された天武朝と推定する。天皇即位の場、大極殿を中心に藤原宮から藤原京へと拡大する同心円状の境界の守護を担うのが、神賀詞の近き守り神であると結論づける。

第二部第二章「味耜高彦根神に関する一考察」では、神賀詞が近き守り神を御魂とする点に着目し、味耜高彦根神について考察する。この神は、記紀の記述から荒魂とみる。また、『古事記』に「アジシキタカヒコネ神」とあり、本来は磯城の神であったとの指摘を踏まえて、同書で「今、迦毛大御神」とされるこの神は、もともとは「磯城の神」である推定する。一方で、葛城の神である「高鴨神」一言主神が土佐に流され、葛城の地を守護する神が不在となったため、大和盆地の境界の地である高鴨の地に、国玉神の子神のアジシキタカヒコネ神は移され、その神には、神功皇后紀にみられる荒魂に則した働きが求められたとする。

第二部第三章「出雲国造神賀詞奏上儀礼からみた大己貴神」では、近き守り神を置いたとされる大己貴神について考察する。大己貴神が坐す杵築大社の立地・景観は新羅との境界と認識され、大己貴神に国土の境界守護が求められたとする。

また、御魂についても検討し、御魂は、神の状態やそれに起因する働きを表すものと推測する。大己貴神は、『日本書紀』では大物主神・大国玉神を含む神格で、大物主神は神賀詞で大己貴神の和魂とされるため、「神賀詞奏上儀礼」の大己貴神は、大国玉神を包摂すると考える。また、大国玉神を大己貴神の荒霊（荒魂）と捉え、大己貴神の荒魂・大国玉神は、『日本書紀』神功皇后撰政前紀の荒魂に則して出雲で祀られたと考察する。

この他、神賀詞には「倭大物主櫛砥玉命登名乎称天」とあるため、和魂の大物主神は祭祀を受け、恩恵をもたらす奇魂となり、荒魂の大国玉神は祭祀を受け幸魂となり、天皇に「幸」〓長寿をもたらすと解釈する。

第二部第四章「東アジアの中の出雲」では、日本と新羅の遣使関係の変化に

注目し、出雲の歴史的な意義を考察する。七世紀後半の東アジア情勢で唐と新羅の接近が顕著になると、日本への侵攻の危機感が再び高くなり、これが「神賀詞奏上儀礼」成立につながったと考える。

また、八世紀後半から九世紀にかけての儀礼の変容は、安史の乱による唐の弱体化が関係していたと推測する。これに伴い、東アジアにおける国際的な緊張感が緩和され、新羅・唐と海を介して接していた出雲国の杵築大社と筑前国の宗像神社は国幣化したと考察した。この変化が、九世紀前半の「神賀詞奏上儀礼」の終焉に繋がったとする。「神賀詞奏上儀礼」の成立と変容には、東アジア情勢が大きく影響していたことを指摘した。

終章では全体を総括したうえで、今後の展望として、神賀詞の内容に記紀を加えて、大己貴神の神格や歴史的な背景について更なる考察を行うとの見通しを立てている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、全編にわたり「神賀詞奏上儀礼」に関する詳細な研究である。特に、神賀詞の内容と奏上儀礼の構成を丁寧に結びつけ、新たに地理学的な視点を加え、「神賀詞奏上儀礼」の成立から終焉までの歴史的な意義を考察した点は、本論文の特徴である。これまで同儀礼を取り上げた研究・論考は多いものの、このような研究はなく、本論文が、「神賀詞奏上儀礼」研究を深化させたのは明らかで、その研究上の意義は大きいと評価できる。

まず、第一部第一章では、先行研究を、江戸時代の国学から二十一世紀の現代まで段階的に整理し、各段階の特徴を丁寧にまとめており、「神賀詞奏上儀礼」が、天皇即位か国造新任に伴うものかとの論点の軌跡を分かりやすく纏める。この結果、本論文の問題意識を長い研究史のなかで明確化させている。

第一部第二章では、国史の記事を丁寧に確認する一方で、玉作に関する考古学の調査・研究成果も参照して、「神賀詞奏上儀礼」は、「即位儀礼である天神

寿詞と対になる概念を形にしたものであり、国神・大己貴神（大穴持命）が天皇の即位において、その御代が長く続くようことほぐ、国神賀詞といえるのではないだろうか」と明確に位置づけた。この所見は、長い研究史のなかで議論されてきた論点に、一つの結論をもたらしたと言つてよい。さらに、この過程で忌部宿祢子首が密接に関与したことを指摘、古代の国家祭祀の一端を担った忌部氏との具体的な関連性を明確にさせたことは大きな成果である。

第一部第三章では、奏上儀礼における負幸物と献物の意義を明らかにした。これは本論文の重要な論点の一つになっている。出雲国造が賜わる「金装横刀」の性格を、「東西文部の解除」での金装横刀と比較し、「請延帝祚」と「御世の長久」とを対応させた点は、これまでにない新たな指摘である。「東西文部の解除」の成立時期は七世紀末期頃と推定でき、律令国家の形成期における祭祀体系のなかで「神賀詞奏上儀礼」を位置づける端緒となる重要な研究成果である。

第二部では、地理的な分析を加えて論点を広げ、「神賀詞奏上儀礼」と境界

について、その背景を大和における「近き守り神」の配置から考察し、あわせて御魂の解釈「御魂論」から、大和葛城地域における御子神たちの動勢に注目する着眼点は、研究を進展させる成果として高く評価できる。特に第二部第二章と同第三章は重要な論点を多く含む。中でも、近代以降、停滞してきた「御魂論」について積極的に取り組み、和魂・荒魂について「神の状態や、ひき起こされる働き」をあらわすという指摘は、宗教学における議論とも整合し説得的であり、今後の研究の広がりを感じさせる。

また、第二部第四章で、七世紀後半の東アジア情勢と関連させて「神賀詞奏上儀礼」の背景を考察する部分は、他にはない本論文の独創性を顕著に示す。唐・新羅との関係性を丹念に跡付け、対外的な緊張感の中で「宮の近き守り神」の意義が国家的に位置づけられたとする指摘は、同儀礼に留まらず、記紀における出雲が、律令国家の形成期に持っていた歴史的な意味を明らかにした。加えて、平安時代の九世紀前半に「神賀詞奏上儀礼」が消滅した背景を、唐・新羅の衰退と、出雲・宗像の神々への祭祀が国幣へと変化したこととを関連付け

て説明する。これは、同儀礼の消滅を、単に律令国家の祭祀・儀礼の変化ではなく、東アジアの交流・交易ネットワークや国家間の関係変化と連動させた広い視野によるもので、本論文の重要な成果である。

一方で課題もまだ残されている。ここでは、行論上で特に重要な問題についてふれておきたい。第二部第二章で、葛城の一言主神の土佐への配流は、本来は天武朝のことで、それを雄略朝に挿入したと解釈する。しかし、葛城地域の重要性は、南郷遺跡群・馬見古墳群などの存在から、すでに五世紀には明確化しており、雄略天皇を五世紀のワカタケルノミコトとすると、雄略朝との関係は十分に検討・考慮する必要がある。この部分の論証は、やや結論を急いだ感があり、論証が不十分といわざるを得ない。関連資料も加えて、高鴨神と一言主神との関係性を含め、さらに丁寧な論証を行う必要がある。

また、第二部第三章で、大和国の大国玉神が出雲国へ移動したと理解する。しかし、大国玉神・大国玉・国玉・国神の神名は、八世紀後半から九世紀の東国の古代集落遺跡から出土する墨書土器で広範囲に複数を確認できる。さら

に、『皇太神宮儀式帳』管度会郡神社行事の大土神社の祭神には「国生神の児、大国玉命」がある。つまり各地の土地の神を「大国玉（魂）命・神」としていた可能性が高い。この神名は、大和国の土地の神に限定されるのではなく、各地域の土地の神を指す一般的な名称とも考えられる。大和の大国玉と出雲の大国玉は、同一の神が移動したのではなく、地域を異にする別の神格として理解すべきではないか。これは、本論文の中心的な論旨と関係する問題であり、さらなる検討と論証が必要である。

こうした課題はあるものの、多くの先行研究を丁寧に読み込み、「神賀詞奏上儀礼」の詳細な分析に、対外関係・交流と境界論の視点を導入し、新たな解釈を提示した本論文は、学位論文に相応しい意欲的な研究成果であることは間違いない。また、本論文の執筆者は、社会人として活動しながら、長年にわたり真摯に研究を続けてきた。その研究姿勢は高い評価に値する。今後も研究を継続し大成されんことを強く希望する。よって、本論文の執筆者、中山さらは、博士（神道学）の学位を授与されると認める。

令和八年二月十七日

主査	國學院大學	教授	笹生	衛	印
副査	青山学院大学	教授	小倉	慈司	印
副査	國學院大學	名誉教授	岡田	莊司	印